

“People ought to live their *own* lives”
 ——*The Scholarship Girl at Cambridge* (1926) における
 自己成型とキャリア

志 渡 岡 理 恵

1. 序論 —— 女子大生小説というジャンル

Josephine Elderの*The Scholarship Girl at Cambridge*(1926)は、労働者階級の両親のもとに生まれ、奨学金を得て女子パブリック・スクールに入った少女モニカが、卒業後、再び奨学金を獲得してケンブリッジ大学に入学し、科学者へと成長していく姿を描いた女子大生小説である。この小説を女子大生小説と呼ぶのは、描かれているのがモニカの寄宿制の大学における生活のみだからだ。ここには、モニカが生家で起こった問題に悩む場面はないし、街で出会った青年に胸をときめかせる場面もない。この作品が排他的に描くのは、生まれ育った場所を離れた少女が大学という別のコミュニティで送る3年間の学生生活であり、前景化されるのは、授業やスポーツ、カレッジでの人間関係がモニカの成長に及ぼす影響である。別の言い方をすれば、この女子大生小説が探求しているのは、大学教育が女性の未来を切り拓く可能性である。これは、「十九世紀後半以降徐々に始まっていた女性の職業進出は、恋愛・結婚という伝統的プロット以外の手段で女性の人生を物語る可能性を生み出した」(秦 73) という女性を取り巻く状況の変化と密接に関わっている。

イギリスで女子大生が小説に登場するのは、Emily Daviesらによる女子教育改革を契機に女子の高等教育が始まった19世紀後半である。女子大生を主人公に据える女子大生小説は、(男子の) 大学小説の女性版として誕生

したが、目新しさも手伝い、1930年代には男子のそれを上回るほどの人気を博した (Bogen 11)。女子大生小説研究の先陣を切ったボーゲンが2014年に作成したリストによれば、最初の女子大生小説は、少女小説の創始者 L. T. Meade の *A Sweet Girl Graduate* (1886) で、ボーゲンは、このミードの作品から Mary Wilkes の *The Only Door Out* (1945) まで、計35冊の小説をこのジャンルに分類している。エルダーの『ケンブリッジの女子奨学生』は、そのリストの真ん中あたりに位置する。

エルダーの女子大生小説には、著者の自伝的要素が織り込まれている。エルダーは、ケンブリッジ大学の女子カレッジのひとつ、ガートン出身の女医で、彼女自身、奨学金を得て進学を果たした¹。20世紀初頭の大学小説の著者は、多くがオックスフォード大学、もしくはケンブリッジ大学の出身者だったので (Bogen 2)、女子大生小説の著者がケンブリッジ大学出身ということ自体は、それほど特異ではない。医師となったエルダーが小説を書き始めたのは、当時、女医にかかろうとする人が少なく、生活費の足しにするためだった。彼女はまず、モニカの子供パブリック・スクールでの生活を描いた *The Scholarship Girl* (1925) を、翌年にその続編となる『ケンブリッジの女子奨学生』を相次いで出版した。

連作は珍しいものの、女子パブリック・スクールに通う少女たちを描いたスクールガール小説と女子大生小説の両方を書く作家は少なくはなく、読者層も重なっていた (Bogen 21)。スクールガール小説の愛読者は、女子大生小説も同じように楽しんだようだ。これは、学校小説というジャンルの人気に加え、女子パブリック・スクールを終えた少女たちの進路のひとつとして大学が射程に入ってきた、ということをも意味する。エルダーの連作は、20世紀初頭の少女たちのそのような意識の変化のひとつの表れでもある。

女子大生小説に関する研究は21世紀に始まったばかりで、牽引するボーゲンは、“No studies of the British women’s university novel exist” (2) と述べ、作品のリストを作成することさえ困難を伴ったと明かしている。確かに、文学研究において女子大生小説というジャンルが指定されたのは最近では

あるものの、19世紀後半以降のイギリスにおける女子の高等教育とキャリア形成の実態については、これまで主に歴史学の分野で、女性史の重要な一局面として統計などに基づいた研究が行われてきた。

たとえば、国外では、21世紀に出版された代表的なものに限っても、1939年までに女子学生を受け入れたイングランドのすべての大学をとりあげたJane Robinsonの *Bluestockings: The Remarkable Story of the First Women to Fight for an Education* (2009) や、オックスブリッジに進学した女性たちと、それ以外の大学に進学した女性たちの異なる経験を比較したGillian Sutherlandの *In Search of the New Woman: Middle-Class Women and Work in Britain 1870-1914* (2015)、初めて女子学生が入学した1879年から1960年までのオックスフォード大学の変化の過程を追ったJudy G. Batsoの *Her Oxford* (2008) などの優れた研究がある。また、それ以前にも、Carol Dyhouseの *No Distinction of Sex?: Women in British Universities 1870-1939* (1995) や、Pauline Adamsの *Somerville for Women: An Oxford College 1879-1993* (1996)、Margaret Birney Vickeryの *Buildings for Bluestockings: The Architecture and Social History of Women's Colleges in Late Victorian England* (1999) をはじめとする多くの多彩な研究書が書かれている。

国内では、この分野の第一人者である香川せつ子は、「エミリー・デイヴィスの女子高等教育思想におけるフェミニズムの考察」(1995)の中で、最初の女子高等教育機関ガートン・カレッジの創立者エミリー・デイヴィスの女子教育思想の内容と歴史的意義を彼女の出自と関連づけながら検討し、彼女の業績は「男女同一原理を女子高等教育に貫徹しようとしたことにある」(225)と論じている。また、「ケンブリッジ大学における科学教育と女性——1880年代から1910年代までの自然科学トライポスを中心に」(2013)においては、ケンブリッジ大学の自然科学優等試験に焦点を当て、女子の合格者の属性やキャリアを調査することにより、当時の自然科学分野への女性の進出の詳細を明らかにしている。さらに、「19世紀イギリスの市民大学と女性の高等教育——女性教育団体の活動を中心に——」(2004)では、オックスブリッジ以外にも目を向け、市民大学の設立された諸都市に

結成された女性教育団体に着目し、その活動をたどることにより、女性による大学教育へのアクセスのプロセスを探っている。他にも、沖塩有希子の「イギリスの19世紀後半から20世紀初頭における女性の高等教育の状況——オックスブリッジにおける女子カレッジの教育的役割と意義」(2005)などがある。

これらの歴史学の研究が示しているのは、新たな教育の機会を手にした当時の多くの女性たちが、それぞれの置かれた状況の中で、最適な道とは何かを自らに問いかけ、必要なものが提供される場を探し、紆余曲折を経ながら独自のキャリアを形成していったという事実である。彼女たちは、集団として実に多彩なキャリア形成のモデルを見せており、日記や手紙には、それぞれの知的・精神的成長の軌跡が鮮やかに刻まれている。

このような歴史学における国内外の研究成果を踏まえ、今後は、小説という文化装置における女子高等教育および女子大生の表象がさまざまな角度から分析されるだろう。そして、英文学史上すでに確立したジャンルとなっている「新しい女」(New Woman) 小説との関連も検証されていくだろう。さらに、「初期モダニズムの多くの作家・芸術家たちに共有されていたテーマ」である「不可能な成熟」が描きこまれた「後期教養小説」(秦 76) や、「モダニズム的(反)成長物語」(大田 36) などとの関係についての研究も進められることが期待される²。

本稿では、そのような試みのひとつとして、『ケンブリッジの女子奨学生』をとりあげ、この女子大生小説に描かれている、大学教育を受けた少女たちのキャリアに対する意識のありようを分析する。家庭という私的領域から出て、大学というコミュニティで「娘」ではなく「個人」として自己を形成していく「新しい少女」(New Girl) の成長物語からは、ジョセフィン・エルダーの(あるいは当時の少女たちの) キャリアに対するどのような意識が見えてくるだろうか。そして、大学教育は少女たちの成長のプロセスにどのように関わるのだろうか。

2. 「美しい苔」で蔽われた世界 —— 大学というコミュニティ

『ケンブリッジの女子奨学生』には、初期の女子大生のひとりだった著者エルダー自身の経験と重なる部分が散見される。舞台となるのは、ケンブリッジ大学の架空の女子カレッジ、ガーナムで、そのモデルは、建物の構造から学生生活の細部に至るまで、エルダーが学んだガートンだと考えられる³。主人公モニカの大学入学までの経歴は次のように説明される。

He [Monica's father] had the greatest respect for learning. And that was why Monica had entered for the scholarship to Greystones when she was fourteen, and why she had won it, and why she had now made her own way to the old university town. It was her father, too, who had taught her to love the beauty of the country, who had taken her on expedition to Epping Forest while she was still a baby, and later had taken her about with him on the family's rare holidays. From her mother she had learnt things more immediately useful, such as how to make her own clothes for a mere nothing, and how to run a house. She inherited good looks from them, and strength, and sturdy common-sense, as well as her good brain; Greystones had given her a public-school training; so she was not badly equipped so far. (20)

ここで注目したいのは、労働者階級のモニカの父親と母親が、子どもの教育に熱心な知的で有能な人物として描かれていることである。モニカは、教育を重んじる父親の影響で14歳のときに奨学金を得て女子パブリック・スクールに入学し、「田園の美を愛すること」も学んだ。母親には、洋裁や家政を教わった。両親から「感じのいい外見、強靱さ、しっかりとした常識、優れた頭脳を受け継いだ」モニカは、「パブリック・スクールの鍛錬」を受けた後、ケンブリッジ大学へと進学する。

モニカが女子パブリック・スクール時代からの親友フランチェスカと共に所属するガーナムは、威厳と余裕の感じられる落ち着いた場所として描

かれている。入学して間もなく、ふたりは学寮長の部屋へ招かれ、モニカはその部屋の静謐さに改めて感銘を受ける。

The room's tranquility struck Monica anew. The lights were shaded, all the colours rich and subdued, the pieces of furniture large and dignified, and set well apart. Dim pictured faces peered from the walls, and here and there a misty water-colour gave an impression of distance, or a mirror gleamed. The little company of dons moved quietly among the students in their thin dresses, and chatted in low voices, and now and then a tinkle of laughter arose. It seemed as if all the ugly, awkward corners of life were overgrown with beautiful moss, rich and soft and green. (24)

「世間の醜い嫌な部分がすべて豊かでやわらかい緑の美しい苔で蔽われたような」学寮長の部屋は、モニカが一員となる資格を得た大学というコミュニティの雰囲気象徴するものである。ここでは、世間にはびこる階級やジェンダーによる差別が問題視されずにまかり通ることはなく、個人の資質や努力こそが評価されるべきだとする暗黙の了解が浸透している。

この暗黙の了解は、モニカと新しい友人ヘスターとの関係の中で前景化される。大学生活に馴染めないヘスターは、医師の一人娘で、心配性の父親に過保護に育てられ、小さな通学制の学校に通っていた。そんな彼女がケンブリッジ大学へ進学することになったのは、伯母の影響があったからである。ヘスターは、“That was an aunt. She said I must learn to stand on my own legs. She made me play games too, and had me properly coached”(63) と、伯母から自立の必要性を説かれ、そのためにスポーツ（競技）をするよう勧められたことをモニカに打ち明ける。「新しい女」ヘスターの伯母が、次世代の姪の教育に心を砕いている点も看過できないが、ここでは、モニカが、かつて女子パブリック・スクールで戸惑った自分の姿をヘスターに重ね合わせ、フランチェスカが自分を助けてくれたように、今度は自分がヘスターを助けようと決意する場面に注目しよう。大学では、仲の良い学友

グループを“family”と呼んでいる。

Monica hesitated. Of the family, only Francesca and kind stolid Dorothy knew the details of her past history. But she felt that if she were going to make a friend of this girl she must be frank with her. It wasn't fair not to be.

“My father's a plumber,” she said.

“Oh!” Hester squealed. “I shouldn't *ever* have thought it!”

Monica flushed and said nothing at all.

“I don't mean,” Hester gabbled on. “That there's anything wrong in being a plumber – but you're such – such an aristocrat here, and I'm such a nobody! I think it's perfectly wonderful of you!” (63- 64)

モニカとヘスターに階級意識があるのは明らかではあるものの、ふたりは大学においてはそれとは異なる評価基準が優先されると認識している。大学では、学業やスポーツ、クラブ活動など、さまざまな場面で努力の成果を発揮した者が評価される⁴。そして、それは、女子パブリック・スクールでモニカが知り、内面化した価値観でもある。モニカが、「この少女と友達になろうとするなら、彼女に対して正直でなければならない」と感じ、「そうしなければフェアではない」と決意するところにも、女子パブリック・スクールで学んだフェアプレイの精神が表れている。

家庭とも世間とも異なる価値観や規律を軸とするケンブリッジ大学はまた、歴史の長さから醸し出される荘厳な雰囲気と美しい緑溢れる静謐さで、学生の心を育てる。世間の喧騒から離れた穏やかで荘重な静けさは、モニカやヘスターに次のような影響を及ぼす。

In spite of herself, Monica found the serenity of Cambridge creeping over her then, putting the little worries into their proper places, insisting that they were not among the things that mattered at all...Hester learned, too, from those walks. The exercise was good for her lazy limbs; the wide calm spaces and the

old buildings taught her how very small she was. But the lessons she learned did not show yet, and Monica did not know she had learnt them...(128)

学友たちとの関係に思い悩むモニカは、ケンブリッジのカレッジ周辺や街を散歩することで冷静になり、自分の抱える悩みが些細なことであることに気づく。一方、自分のことしか頭にない近視眼的なヘスターは、歴史ある建物や広々とした緑の空間を眺めているうちに、いかに自分が小さな存在にすぎないかを感じるようになる。

このような環境の中で、モニカたちはそれぞれの歩調で学びを重ねていく。学生の自立を促す大学には、「答えは自分で探すもの」という共通認識がある。たとえば、ヘスターが、化学の教師ミス・ヘップバーンが分かるように教えてくれないと不平をもらしたとき、モニカは、“She’s rather keen on leaving us to find out things for ourselves” と論じ、“She says it’s good for us, and I think it is. We shan’t always have her to tell us things.” (114) と、「学生は自分で答えを探すべき」という考え方に賛成であると言う。また、親友モニカを心配するフランチェスカは、彼女をトラブルから救いたいと胸を痛めながらも、“She knew that Monica would not be convinced, and she had an uneasy feeling that she was right not to be convinced, even by her greatest friend, but to learn, however painfully, for herself. That was the sort of person Monica was. She was strong enough to learn for herself.” (86) と、モニカが自分で気づいて学ぶべきだと考え、彼女にはそれができると信じている。

こうして、女子パブリック・スクールで培われた精神と習慣を基盤としながら、女子学生たちは、自立へ向けて、学業、スポーツ、クラブ活動に打ち込んでいく。その障害となりかつ成長の原動力ともなるのが、カレッジでの人間関係である。他者との交流あるいは衝突を通して、彼女たちは、自分のありかたを模索することになる。

3. “We fall, to rise” —— 「ありのままの自分」

モニカが大学で学ぶ最も重要なものは、「ありのままの自分である」ことの大切さである。大学では、自分を偽ることが徹底して否定される。たとえば、ミス・ポープとミス・リングウッドは、変わり者を装い、「ありのままの自分」を隠しているために、学友たちから疎まれていく。

No; those two were odd on purpose, had covered up their real selves with a patchwork of oddness, because they wanted to be unusual, not because they really were. They weren't genuine, that was why everyone disliked them.

Everyone, that was to say, who was more or less sincere herself. (37)

ここで批判されているのは、「変わっていること」それ自体ではない。彼女たちは、実際はそうではないのに、自分は凡人とは違う特別な存在であると印象づけたいがために、意図的に風変わりを装っているから嫌われている。では、「ありのままの自分」を隠さないというのは、自分の好きなように振る舞うということなのだろうか。

「ありのままの自分」でいるとは、自己中心的に振る舞うことではない。女子パブリック・スクールを舞台とする小説と同様に、女子大生小説でも「団体精神」は極めて重要なものと捉えられている⁵。学校という教育機関では、自分のことよりも、チームや学校のことを考えて行動するのが重要であると教え込まれる。たとえば、モニカの仲間のひとりドロシーは、ヘスターを批判する際に“...She thinks about herself, not about the game. She'd never bother to train and be fit, and she'd never play if she didn't feel inclined, just for the sake of the team” (38) と、ヘスターの団体精神の欠如を指摘する。また、ケンブリッジ大学の教授であるフランチェスカの父親は、娘たちからヘスターの話聞き、次のような意見を述べる。

“She [Hester] was lazy and weak and selfish and slovenly – or so I gather,”

the professor said. “No one who has those defects ever gets on well in a community unless he has great brains or great charm to blind folks with. He’s just passed over, if he isn’t actively disliked, and left to himself. No one quite knows why at the time. Looking back, one sees that there was something odd about him; generally, that he was completely taken up with himself, and never once showed any interest in the feelings of anyone else.”

“Hester Williams is just like that,” Francesca put in. (153)

フランチェスカの父親が示唆しているのは、コミュニティの中で他者との関係を構築していくには他者を思いやる気持ちが必要ということである。

それでは、「ありのままの自分」でいるとは具体的にどういうことを意味するのだろうか。それは、階級などを理由に他者が植えつけようとする劣等感に歪められることなく、自分を正当に評価する勇気を持ち、自信を持って振る舞うことである。モニカは、仲間たちの反対を押し切って手を差し伸べた相手であるヘスターから、“You’ve forgotten you’re just a scholarship girl” (146) と罵られる。しかし、フランチェスカの父親からは、次のような温かい言葉をかけられる。

“You’ve told us quite a lot about yourself,” he said. “Your mother’s people are farmers. We’ve met some of them. Your father’s have been artisans for ages – highly-skilled workmen, shrewd and honest and intelligent. And you’re the result – splendidly strong, with a first-class brain and the will-power to use it; clear-sighted, not put off by trifles; generous and kind, and honest even with yourself.” (156)

フランチェスカの家族は、モニカの話聞き、彼女の家族に会い、彼女たち一家を正当に評価して親愛の情を惜しみなく示してきた。それにもかかわらず、“She [Monica] felt that she was an interloper, a scholarship girl from an elementary school among all these girls from rich, refined homes” (39) と、ど

こか疎外感を抱いていたモニカは、大学生活を通して “...strangely, Monica did not mind any more whether they smiled or not. She had discovered that other people’s opinion of her did not matter nearly so much as her own honest opinion of herself” (138) と、他人が自分をどう思うかよりも、自分が自分をどう思うかの方が大事であると認識していく。

そして、火事に遭遇した際、リーダーシップを発揮して学友たちから賞賛を浴びたことをきっかけに、モニカは自信を取り戻す。そのときに傍らで支えてくれたのは、やはり親友のフランチェスカ（愛称ロビン）だった。

Everyone seemed to be watching Monica. She had assumed leadership all unconsciously, and now they were asking it of her.

She would want someone to help. There was only one person she knew she could really trust. “Robin!” she called. “Robin!”

A scurry, and Francesca, in coat, pajamas, and thick shoes, was by her side, gray eyes glinting joyously. “Water – over us!” Francesca was saying. She seized a pail of water and threw half of it over herself, half over Monica. “We don’t want to get sparks,” she gasped. “Come on!”

Hand in hand, dripping, they ran towards the shed...(134)

この場面で描かれているモニカとフランチェスカの勇気と有能さ、そして固い信頼関係は、彼女たちの日々の鍛錬によって培われたものである。彼女たちが迅速に対応できたのは、日頃からカレッジの自治消防隊の訓練に積極的に参加してきたからであり、ホッケーに熱心に取り組んで観察力、判断力、体力を身につけ、チームプレイに慣れていたのである。この事件をきっかけに、モニカは自分の真価を悟り、自信を取り戻していく。

この自信の創出こそ教育が与えるものだと、フランチェスカの父親はモニカに語る。

The professor glared at her. “Don’t let me catch you being ashamed of your

ancestors again, young woman. No, if you lack anything, it's confidence; and you're getting that as fast as education can give it to you. It's the sort of person you are that matters; the polish only makes life a bit easier for you. And education only makes you a bit more use in the world." (157)

ここで示されているのは、教育とは学生に自信を与え、学生が世の中でより役に立てるように手助けする役割を担うものだという教育観である。それを証明するかのよう、モニカは、フランチェスカに次のように打ち明ける。

"...I am a bit odd. I had a different start from most of you – yes, I did" – as Francesca made an impatient movement – "and I used to be sensitive about it. I was terrified that people would see. And now – I don't mind if they do see. I'm some use, even if I am odd. I – I've proved myself, and now I can be myself, now that I know that people who really matter, like your father and Hebbly, don't disapprove of the real me..." (168-169)

モニカは、自分の真価を知り、尊敬する指導教師ミス・ヘップバーン（愛称ヘビー）やフランチェスカの父親らが「ありのままの自分」を信頼してくれていることを支えに、階級意識に根差す劣等感から解き放たれる。

教育の効果は、モニカばかりでなく、ヘスターにも表れる。ヘスターはモニカから離れ、自分の道を歩き始める。“You are better than I am at things. You're a better person than I am. I know that. That's the trouble, I think, that I always do know it. It's bad for one to be inferior all the time. One ought to be friends with one's equals. So I'm going – to my equals.” (147) と別れを告げるヘスターに、モニカは“You can stand on your own legs now” (147) と穏やかに答えて見送る。しばらくして、モニカは、川に落ちた子どもを助けるヘスターの姿を目撃する。救助の後、見つめるモニカに気づいたヘスターは、“As though in answer, Hester turned towards the river, saw Monica, and waved

to her, confidently, in front of all the family and of her own queer friends. ‘I’ve proved you right!’ she seemed to say. ‘I’ve found *my* self too!’” (175) と、自信に溢れた様子で手を振る。ヘスターもまた自分を知り、自分の能力を他者のために使い、自信を持つことができるようになったのである。

4. “People ought to live their *own* lives” —— 個性と多様性

女子大生小説では、「世の中の役に立つこと」が職業に直結する。『ケンブリッジの女子奨学生』においても、結末部分では、モニカたちがどのようなキャリアを選択するのかが描かれている。入学して間もなく、モニカは、ミス・ヘップバーンから“...Work’s the important thing. You’ll go far if you stick to it – be a bit of use in the world, which is more than most of us can hope for.” (50) と、勉強して世の中の役に立つことが重要であると助言される。

キャリアについて考えたとき、モニカの頭に真っ先に浮かんだのは、「ひとは自分自身の人生を生きるべきである、他人の人生を真似するのではなく」という思いだった。ヘスターがモニカと一緒にいたいというだけの理由で専攻を変えたと聞いたとき、モニカは次のように考える。

“People ought to live their *own* lives, not to copy somebody else’s!” That was the thought that first took shape in her mind. She had a second’s vision of life as a broad road along which travellers tramped, each towards some given goal; side roads ran into it, and sometimes the main road forked; people came out of the side roads, and one traveller would join another and walk pleasantly with him for a time; then, reaching a fork, would know that here lay his way, and would leave his companion, regretfully, perhaps, and hoping to meet him again....That was right and proper. (98)

旅人が、人生という道を、それぞれの目的地に向かって歩いている。細い道を抜け、大通りで他の旅人に会い、しばらく一緒に楽しく歩く。やが

て別れ道にさしかかると、惜しみながら、また会いたいと願いながら、再びそれぞれの道を進んでいく。そのような人生の歩き方が適切であると、モニカは捉えている。

学友たちも、このモニカのヴィジョンを共有している。3年生になり、最終試験を目前にして、女子学生たちは、週末以外はひとりで勉強に打ち込むようになる。

She nearly always worked by herself now, and so did the others, for work was too serious a matter to admit even the possible dissipation of a conversation between hall and bedtime....But on Saturday evenings they always relaxed, and danced or went to debates, and on Sundays visited their friends in Cambridge or went for walks. Life was too full for thought, too full for anything but organized work and play. (164)

彼女たちがこれほど真剣に勉強に打ち込むのは、それが将来（キャリア）を大きく左右すると認識しているからである。たとえば、モニカは、実験室を備えた学校に職を得ることができれば、教えることで生活費を稼ぎながら、空き時間に研究を続け、いつかは大学の教師になれるかもしれないと考えていた。しかし、指導教師から、試験で最優等を取り、論文を出版すれば、ケンブリッジ大学でさらに1年間研究を続けるための奨学金を用意できると言われる。猛勉強したモニカは、最優等を取る。

こうして、モニカは科学者への道を切り拓く。そして、仲間たちも“Dorothy was going to do social work in the east end; Francesca to the School of Economics; Beth and Olive to teach; Margaret to Geneva to the League of Nations; and Muriel and Violet home to be perfect ladies” (167) と、それぞれのキャリアを選択する。貧民街でのソーシャル・ワーク、進学、教職、国連での仕事、レディ教育の仕上げと、彼女たちの選択は多種多様である。「家庭の天使」あるいはガヴァネス、というヴィクトリア時代のステレオタイプは、ここにはない。仲間全員で最後となるピクニックに出掛け、パンティングを楽

しみながら、モニカは、個性の異なる友人たちがそれぞれ似合う色の服を着て、思い思いのことをしている様子を眺めながら、「みんな、なんて素敵なのだろう」と思う。

Monica lay and looked at them, and thought how nice they were. Dorothy, tall and broad, in green linen, punted the first load, her woolly hair blowing round her sunburned face, her kind, shy, gray eyes looking steadily ahead; stout, rosy Beth like a country girl, Olive thin and dark and vivacious, all in white; Violet in orange, her fair hair in great shells over her ears, her eyes roving round observantly as she lay draped becomingly among the cushions. In another punt, Muriel stood, slim and willowy, her dark head beautifully poised, handling her pole as if it were a reed; and Margaret and Mary, the inseparable lacrosse players, a plain, dependable pair, were laughing and teasing together.

They were so healthy and sure of themselves, so royal to those whom their rather capricious liking was given, so unsentimental, so tremendously alive and intelligent! (169-171)

色彩溢れる牧歌的なこの場面では、それぞれの個性が、優劣をつけられることなく愛情を持って称えられている。誰もが自信に溢れ、気の合う仲間に対し誠実で、活力に満ちている。ひとりひとりの個性が認められ尊重されることで多様性が生まれるユートピアが、ここにはある。

5. 結論

『ケンブリッジの女子奨学生』は、親友フランチェスカと共に順調に大学生活を始めたモニカが、溶け込めずにいるヘスターを助けようとして仲間たちと疎遠になり、劣等感に苛まれるようになるものの、そこから自信を取り戻し、再び立ち上がるまでを描いている。これまで読み解いてきた

ように、モニカがありのままの自分を受け入れ、さらにヘスターまでが「本当の自分」を発見していくプロセスには、世間とは異なるケンブリッジ大学という教育機関の独特の雰囲気が深く関わっている。

女子の学校小説では、家を離れ、学校という公的空間で、同世代の多数の少女たちが生活を共にする姿が描かれる。学校というコミュニティには独自のルールがあり、ルールを守るように促す規律がある。そこでは、階級ではなく、個人の資質や努力が重要視され、学業やスポーツの成績、何かに秀でていること（＝個性）が評価される。少女たちは、自分の「個性」を探求し、それを磨いて周囲に認められることで、コミュニティにおける居場所を確保していく。これは、家庭という私的空間において娘、妻、母親としての役割を果たすことのみを要請されていた女性たちが、社会においてそれ以外の役割を果たすための準備をすることを期待されるようになったことの表れでもある。

「ありのままの自分」(＝個性)を見出した少女たちは、自分に最適なキャリアを選択し、また他者の個性とキャリア選択を尊重する態度を身につける。同じようになりたいと他人を真似るのではなく、彼女たちは、自分の個性を見極め、努力によってそれを伸ばし、自分にふさわしいキャリアを選べるようになるのである。『ケンブリッジの女子奨学生』が描いているのは、そのような「新しい少女」の成長のプロセスと言えるだろう。主人公の挫折を描きながらも、清澄な明るさと活力に満ちたこの小説には、章のタイトル“*We fall, to rise*”や“*Are baffled, to fight better*”が象徴的に表しているように、「新しい女」のひとりだった著者エルダーの、次世代の少女たちに対する熱いエールが込められている。

注

1. エルダーは、1895年にロンドン南部のクロイドンで生まれた。地元のクロイドン・ハイスクールで学びながら女校長の支援を受けた彼女は、奨学金を得てガートン・カレッジに入学した。その後、エルダーは、医学を志し、ロンドン・

ホスピタルで勤務医として数年間働いた後、サリー州で開業した。

2. イギリスの大戦間期の女性の教養小説については、「主人公の半生に作者自身の自伝を仮託した教養小説であり、芸術家の成熟を描く芸術家小説」(秦 71)でもあるメイ・シンクレアの『メアリー・オリヴィエ』(1919)についての論文である秦邦生「『幼年期』の終わり?メイ・シンクレアと初期モダニズムのジレンマ」を参照。「モダニズム的(反)成長物語」に関しては、大田信良『帝国の文化とリベラル・イングランド——戦間期イギリスのモダニティ』第2章を参照。
3. ガーナム・カレッジは、ケンブリッジ大学の当時のふたつの女子カレッジ、ガートン・カレッジとニューナム・カレッジを組み合わせた架空の名称である。
4. このような考え方は、オックスブリッジの女子寮に共通していたようだ。オックスフォード大学の女子寮出身の作家 Dorothy Sayers は、同大学出身の探偵小説家ハリエットを主人公にした小説 *Gaudy Night* (1936) の中で、久しぶりに母校を訪れたハリエットが激しい郷愁に襲われ、“If only one could come back to this quiet place, where only intellectual achievement counted” (18) と思う場面を描いている。すでに社会で多くの苦い経験を積んでいる彼女は、この場所に戻りたいという想いと、もう戻れないという想いに引き裂かれる。“But she doubted whether she were now capable of any such withdrawal. She had long ago taken the step that put the grey-walled paradise of Oxford behind her. No one can bathe in the same river twice, not even in the Isis. She would be impatient of that narrow serenity – or so she told herself” (19) と。「オックスフォードという灰色の壁に囲まれた楽園」や「あの狭い静穏」という言葉には、ハリエットの葛藤するふたつの感情—憧憬と批判—が表現されている。大学を出て社会で仕事を始めた女性の視点から描かれる『学寮祭の夜』は、現役の女子大生の視点から描かれる『ケンブリッジの女子奨学生』とは重なりつつもいくぶん異なる大学の捉え方を示している。
5. 女子パブリック・スクールにおける「団体精神」の重要性については、志渡岡理恵「アイルランドから来た新入生——*The New Girl at St. Chad's*におけるナショナリズム」参照。なお、モダニズムの代表的作家 Virginia Woolf は、*A Room of One's Own* の中で「団体精神」を否定的に描いている。これについては、『下田歌子記念女性総合研究所年報』第5号(2019年3月刊行予定)に掲載予定の志渡岡理恵『「外から見た女子学寮」——ヴァージニア・ウルフと女子高等教育』で詳しく論じている。

参考文献

- Adams, Pauline. *Somerville for Women: An Oxford College 1879-1993*. Oxford University Press, 1996.
- Auchmuty, Rosemary. "The Woman Law Student and the Girl's College Novel." *Canadian Journal of Women and the Law*. 19.1 (2007): 33-71.
- Bank, Andrew. "The Making of a Woman Anthropologist: Monica Hunter at Girton College, Cambridge, 1927-1930." *African Studies*. 68.1 (2009): 29-56.
- Batson, Judy G. *Her Oxford*. Vanderbilt University Press, 2008.
- Bogen, Anna. *Women's University Fiction, 1880-1945*. Pickering & Chatto, 2014.
- Cadogan, Mary. *Mary Carries on: Reflections on Some Favourite Girls' Stories*. Girls Gone By Publishers, 2008.
- Dyhouse, Carol. *No Distinction of Sex?: Women in British Universities 1870-1939*. UCL Press, 1995.
- Elder, Josephine. *The Scholarship Girl*. 1925. Girls Gone By Publishers, 2011.
- . *The Scholarship Girl at Cambridge*. 1926. Girls Gone By Publishers, 2012.
- Enever, Alison. "'How the Modern Girl Attains Strength and Grace': the *Girl's Own Paper*, sport and the discipline of the female body, 1914-1956." *Women's History Review*. 24.5 (2015): 662-680.
- Field, John. "Service learning in Britain between the wars: university students and unemployed camps." *History of Education*. 41.2 (2012): 195-212.
- Goodman, Joyce and Sylvia Harrop, eds. *Women, Educational Policy-Making and Administration in England: Authoritative Women since 1880*. Routledge, 2000.
- Holloway, Gerry. *Women and Work in Britain since 1840*. Routledge, 2005.
- Macdonald, Charlotte. "Body and Self: learning to be modern in 1920s-1930s Britain." *Women's History Review*. 22.2 (2013): 267-279.
- Mackinnon, Alison. *Love and Freedom: Professional Women and the Reshaping of Personal Life*. Cambridge University Press, 1997.
- Martin, Jane and Joyce Goodman. *Women and Education, 1800-1980*. Palgrave Macmillan, 2004.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England 1880-1915*. Columbia University Press, 1995.
- Newby, Jennifer. *Women's Lives: Researching Women's Social History 1800-1939*. Pen & Sword, 2011.
- Phillips, Ann, ed. *A Newnham Anthology*. Cambridge University Press, 1979.
- Purvis, June. *Women's History: Britain, 1850-1945: An Introduction*. Routledge, 1995.

- Richardson, Angeliqne and Chris Willis, eds. *The New Woman in Fiction and in Fact: Fin-de-Siècle Feminisms*. Palgrave Macmillan, 2001.
- Robinson, Jane. *Bluestockings: The Remarkable Story of the First Women to Fight for an Education*. Viking, 2009.
- Rowbotham, Sheila. *Dreamers of a New Day: Women Who Invented the Twentieth Century*. Verso, 2010.
- Sayers, Dorothy. *Gaudy Night*. 1936. HarperCollins, 2012.
- Shils, Edward and Carmen Blacker, eds. *Cambridge Women: Twelve Portraits*. Cambridge University Press, 1996.
- Smith, Michelle. *Empire in British Girls' Literature and Culture: Imperial Girls, 1880-1915*. Palgrave Macmillan, 2011.
- Sutherland, Gillian. *In Search of the New Woman: Middle-Class Women and Work in Britain 1870-1914*. Cambridge University Press, 2015.
- . “Self-education, class and gender in Edwardian Britain: women in lower middle class families.” *Oxford Review of Education*. 41.4 (2015): 518-533.
- Thane, Pat. “Girton Graduates: earning and learning, 1920s-1980s.” *Women's History Review*. 13.3 (2004): 347-361.
- Vickery, Margaret Birney. *Buildings for Bluestockings: The Architecture and Social History of Women's Colleges in Late Victorian England*. Associated University Presses, 1999.
- Wiggins, Sarah. “Gendered Spaces and Political Identity: debating societies in English women's colleges, 1890-1914.” *Women's History Review*. 18.5 (2009): 737-752.
- Zweiniger-Bargielowska, Ina, ed. *Women in Twentieth-Century Britain*. 2001. Routledge, 2014.
- 大田信良『帝国の文化とリベラル・イングランド——戦間期イギリスのモダニティ』慶應義塾大学出版会, 2010.
- 沖塩有希子「イギリスの19世紀後半から20世紀初頭における女性の高等教育の状況——オックスブリッジにおける女子カレッジの教育的役割と意義」『日英教育研究フォーラム』第9号, 2005, 19-36.
- 香川せつ子「エミリー・デイヴィスの女子高等教育思想におけるフェミニズムの考察」『日本の教育学』第38巻, 1995, 210-229.
- . 「19世紀イギリスの市民大学と女性の高等教育——女性教育団体の活動を中心に——」『永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要』第34巻, 2004, 71-81.
- . 「ケンブリッジ大学における科学教育と女性——1880年代から1910年代までの自然科学トライボスを中心に——」『西九州大学子ども学部紀要』第4号, 2013, 21-33.
- 志渡岡理恵「アイルランドから来た新入生——The New Girl at St. Chad'sにおけるナ

シヨナリズム』『実践女子大学文学部紀要』第55号, 2013, 16-24.
秦邦生 「「幼年期」の終わり?メイ・シンクレアと初期モダニズムのジレンマ」『転
回するモダン——イギリス戦間期の文化と文学』研究社, 2008, 70-90.

* 本稿は2015年5月に立正大学に於いて開催された日本英文学会第87回全国大会
ワークショップ「学校の内と外——イギリス、アメリカ、日本を比較して」(講師:
富山太佳夫、佐々木真理、辻吉祥、志渡岡理恵)における発表「カムフラージュ
する文化——スクールガール小説と女子大生小説」に大幅な加筆・修正を施した
ものである。